

## 愛知県環境審議会総合政策部会 会議録

### 1 日時

平成19年4月24日（火）午後2時～午後4時30分

### 2 場所

愛知県三の丸庁舎8階会議室804

### 3 出席者

委員9名、専門委員3名、説明のために出席した者（環境部職員）14名

### 4 議事の概要

環境基本計画の変更について

#### (1) 新しい環境基本計画の骨格について

##### ・事務局

資料1（第3章 計画の目標について）の説明

##### ・質疑等

（藤江委員）

日本国中どこでも使える内容になっている。愛知の特性、地域性は何か。愛知県として国の計画などをにらみながら環境をどういう方向に持っていくのかが分かる  
とよいと感じた。

（加藤久和部会長）

協働が四つの目標を横断的に支える構造になっている。その説明が、地球的視野  
で環境を考えるということのみが強調されている。ここに、地球的視野で環境をと  
らえつつ、一方で地域の特性を踏まえるという説明を加えることで解決できないか。

（事務局）

目標は人類普遍のものを掲げ、分野別の施策のところでは愛知県の独自性を出した  
いと考えている。愛知県は、産業活動が活発であり交通の結節点でもあるので脱温  
暖化社会は避けて通れない問題である。大都市を抱えながら自然の恵豊かな地域で  
もあるのが自然との共生も掲げたいし、産業活動が活発という面からは循環も掲げ  
たい。これらは愛知の特色であり全国共通の課題でもあるので、目標だけでは愛知  
の特色を出しにくい。

（中村委員）

あいち環境社会というタイトルだと何が愛知らしさなのかと言いたくなるが、確かにここで記述するのは難しい。

(加藤久和部会長)

目標は普遍的なものにならざるを得ないが、シンク グローバリー、アクト ローカリー (Think Globally, Act Locally) ということから、協働の説明の中で愛知県の環境基本計画であることを表したい。

(吉田委員)

新しい低炭素という概念を、これから認知してもらおうという意味も含めて強調してはどうか。5年ごとに計画を作るのだから前回と違うところにポイントを絞ってもよいのではないか。

(芹沢委員)

安心の位置付けが少し弱い。低炭素、循環、共生が実現すれば安心につながり、グローバルな人類の健康が確保される。

(篠田委員)

安心が前提としてあって、さらに上の三つのものを目指すという目標は現実にも合っている。ここで無理に愛知らしさを出さなくても施策のところを出せる。

(芹沢委員)

安心と協働が並んでいるのがおかしい。協働はアプローチなので横断的であるのは分かるが、安心は性質が違う。

(清水専門委員)

県は安心・安全という使い方をしている。安全を入れた方がいいのではないか。また、低炭素は違和感がある。省エネ、エネルギー転換ということからも脱温暖化の方がいいのではないか。協働のところには地域社会のことを入れた方がよい。共生については、説明文を短く。安心・安全については、何々がないので安心するというような例示を入れるとよい。

(加藤久和部会長)

アスベストやフェロシルトの問題など、環境行政の基本的なところは押さえておかなければならない。安心・安全は、低炭素や循環などとは別の根底にあるものである。

(板倉委員)

安全・安心は環境が良くなった結果ではないか。結果を入れるなら安全・安心・快適ということになるが。

(藤江委員)

持続性とクオリティーオブライフ (QOL) をどう追求していくかという話にな

ると、目標に対するアプローチが違ってくる。また、安全と安心は別のものである。安全は物理的な安全であり、安心は人の心が入るので、この点を議論する必要が出てくる。

(加藤久和部会長)

議論を整理すると、低炭素又は脱温暖化を入れて強いメッセージ性を出すことには賛成だが、その位置付けをうまく表現できないかというのが一つ。安心又は安心・安全の位置付けをどうするかが一つ。最後に快適まで入れると目標の意味も変わってくるということ。

(篠田委員)

低炭素は県民に理解されにくいので、公の計画で使うのはよいのかと思う。

(芹沢委員)

低炭素は本来なら循環の中だと思うが、あえてそれを引っ張り出して使うことで言葉を認知させることに意味があるのかもしれない。また、クーラーを効かせた部屋は快適であり、快適の追求により環境を破壊するという面もあるので、快適という言葉は慎重に考えた方がよい。

・事務局

資料2(第4章 政策展開の方向(1 基本的考え方)について)及び資料3(第4章 政策展開の方向(2 施策の内容)について)の説明

・質疑等

(藤江委員)

この地域は世界中に大量の工業製品を輸出してきたが、環境のあり方を含めてカルチャーの情報発信はしていない。世界の最先端の工業生産を持ちながら中山間地域や閉鎖性水域もあり農業とも共生しているのは、世界から見ても珍しい。最先端テクノロジーと自然の共生などをアピールできるとよい。

(足立委員)

環境にやさしい、環境の分かる人を作っていく環境教育が大切ではないか。

(井上専門委員)

環境と経済の好循環を目玉にするという話が前回あった。産業界は低炭素と関わりが深いですが、これは環境省が取り組んでいる問題でもあるので、ここだけ強調されると論点がずれるし、施策に重複が生じる。愛知県の環境基本計画は、街づくりや公共交通機関のあり方など県民の身の回りの分かりやすい内容に重点を置くのがよいのではないかと。

(北田委員)

基本的考え方(3)の愛知万博の記載はバランスを欠く。

(井上専門委員)

基本的な考え方(3)のタイトルは環境技術や先導的技術を積極的にこの地域が進めていくという内容が分かるものにして、説明の中に愛知万博を入れるとよい。

(加藤久和部会長)

基本的考え方(2)の環境と経済の好循環の促進についてはどうか。

(井上専門委員)

入れることについては構わない。

(芹沢委員)

施策の展開について、農山村の問題が検討の結果入らなかったのは残念だった。

(加藤久和部会長)

街づくりに合わせて里地、里山を入れるし、生物多様性や水循環などのところでも出てくるのでクロスリファレンスで対応することとしたい。

(北田委員)

施策の展開(3)は具体的な施策であるので、それとの並びで考えるならば(1)は脱温暖化システムなどの具体的なものにすべきだろうし、そうでないとする(1)、(4)、(6)などに含まれることになる。また、地域分散型エネルギーシステムは街づくりである。

(藤江委員)

どういう経緯でこういうくり方になったのか。

(事務局)

本来なら目標達成のために実施すべき施策の柱を立てた上で事務事業を整理すべきだが、現実に動き出している事務事業もあるため、それらを眺めた上で重複を避けながら分かりやすく分野ごとに分類した。施策の第1から第6まではこれまでの環境行政の分野別の分類であり、第7から第9までは各分野にまたがる共通事項を掲げた。

(北田委員)

農山村は脱温暖化より水循環、生物多様性の方がふさわしいので、もう一回整理することが必要である。

(藤江委員)

くり方の基準が示されればよいと思うが。

(事務局)

森林については多面的機能がある。温暖化の面ではCO<sub>2</sub>吸収ということがあり、生物多様性の保全の面では生物が多様に生存する空間という意味があり、水循環の面では保水性ということがある。環境の視点で項立てを行い、それぞれふさわしい

ところで記述していくことになる。

(加藤久和部会長)

環境基本計画であれば重複掲載は当然出てくる。ただ、レベルの違うものをくくっているという指摘もあったので、どういう視点から施策をくくるべきか提案して欲しい。

(井上専門委員)

市民に分かりやすい施策である街づくりを最初に持ってきて、温暖化も市民レベルでの取組やライフスタイルの記述を中心にする。産業界の問題は国レベルのことなので、後の方で記述することでよいのではないか。10年先ではなくもっと身近で具体的な政策から入っていくことが県民には分かりやすい。

(加藤久和部会長)

施策の第1、第2、第5のくくり方についてはもう一度委員からの提案を受けたい。第3については位置の問題があり、委員からの提案を踏まえて案をまとめたい。それではここまでの議論を踏まえて、資料1の目標の論点に戻る。低炭素社会の位置付けを工夫するのは難しい。

(吉田委員)

現在の基本計画からの脱皮という意味から低炭素を施策の中などで強調してはどうか思う。

(加藤久和部会長)

低炭素という言葉になじみがなく、脱温暖化社会ではどうかという点については。

(篠田委員)

低炭素は、省エネルギー、省資源のことではないか。

(吉田委員)

認知してもらうためにも中身をもっと明確にする必要はある。

(板倉委員)

低炭素という言葉が本質の一部しか表現していないように思える。やはり省エネルギー、省資源ということであろう。

(加藤久和部会長)

国際的には脱温暖化よりもローカーボン ソサイエティー (Low-Carbon Society) が使われており、これが低炭素社会と訳されているようだが。

(藤江委員)

低炭素という言葉は環境省が使いこれからかなり普及してくると思う。低炭素には脱化石燃料という意味もある。省エネも自然エネルギーの利用を含んで使われている。低炭素という言葉は耳慣れないが、使ってもいいかなとは思っている。

(加藤久和部会長)

安心を安心・安全とするかも含めて、これを基盤とすることについてはどうか。

(北田委員)

何のために低炭素・循環をやるのかという将来にわたる安心を担保するためである。

(藤江委員)

安心・安全は目標であり低炭素の上に来るのではないか。

(中村委員)

全体を囲んで安心社会でもいい。

(芹沢委員)

安心・安全イコール持続可能である。本来一番上であるが、ここでは安心・安全をもう少し限定して使っているのではないか。

(藤江委員)

本来の目標がQOLなので、それを安心・安全で置き換えるなら一番上ではないかということである。

(加藤久和部会長)

安心・安全は目標としては欠かせないと思うので、表現や模式図については事務局で検討して欲しい。

(事務局)

安心については、具体的な施策では従来からの環境行政の基本となる公害対策のような狭い意味合いで使っている。目標のところではかなり広い表現をしているが、先ほど指摘のあった公害のない社会などという限定した表現にした方が施策の内容と合うので検討する。

## (2) 環境基本計画策定までのスケジュールについて

### ・事務局

資料4 (愛知県環境基本計画の策定までのスケジュール (案)) の説明

### ・質疑等

(加藤久和部会長)

県民の意見を聴く会については、分散してでもいいので委員の皆様に参加してもらいたい。

以 上